



1973年(昭和48年)ごろの高槻地区商店街(現高槻センター街)。この頃、すでに商店街の雰囲気は現在と同じような印象。



(上)新京都商店街の風景1963年(昭和38年)ごろ。(左)高槻センター街から発行された「写真で綴る 高槻センター街50年史」。1979年9月発行。



◀昭和2年頃の中心街のマップ。中川さんの父親、故中川市太郎(元高槻センター街理事長)さんの手書きのマップをもとに作成。

- ① 国鉄高槻駅(現JR高槻駅)の周辺は田んぼに囲まれていた。
- ② この道は西国街道と高槻城下を結び榎尾川まで続く幹線道路だった。
- ③ 新京都通が後に「高槻センター街」となる。
- ④ 明治9年に「国鉄高槻駅」として開業。高槻城の石垣を切り崩して、鉄道建設の石材が流用された。
- ⑤ 1928年(昭和3年)新京阪鉄道(現阪急電鉄)「高槻町駅」として開業。1943年(昭和18年)に「高槻市駅」改称。

旧町村	世帯数	男女計
高槻	1,263	5,535
芥川	1,050	5,233
清水	714	3,484
清盤	643	2,934
大冠	590	2,919
合計	4,260	20,095

高槻市の人口は、昭和30年代に10万人を超え、昭和44年に20万人、昭和48年に30万人に達する。昭和40年代は1年で2万人増のペースで、学校が足りないなどインフラが追いつかないほど急激に人口が増えた。



1954年(昭和29年)2月24日、市営バス開業式の日の花バス。



1963年(昭和38年)、国鉄高槻駅北口、市営バスのりば。



1960年代、デモ行進のようす。



高槻センター街を走り抜けるバス

1954年当時、狭いセンター街を市バスと京阪バスが走っていた。この危険な状況は何年も続いたが、やがて商店街の店主たちがアーケードの建設や安全性を求めて立ち上がる。赤いハチマキを巻き、「安心して買い物できる商店街にしよう」とプラカードを掲げデモ行進を決行。1970年によく全面通行禁止になった。



1973年(昭和48年)ごろ、建設中の西武百貨店(火災後)。



1970年(昭和45年)に第1回高槻まつりが行われた。高槻市の人口が急激に増加したため、新市民と旧市民の心の調和をとるため、また「ふるさとづくり」を目指して始めた。



昭和50年代の写真。西武百貨店の向かいにアクトアモールがつくられる。



1979年(昭和54年)7月1日、グリーンプラザたつき1・3号館オープン。

2006年 アクトアモールの完成

芥川商店街とJRで囲まれた三角地帯は、長い間大きな商業施設がなく、木造住宅が密集していた。そこへ、JR駅前を高槻の玄関先にしようと地元住民から声上がり、再開発事業がスタートする。2002年から2006年アクトアモールが華々しくオープンした。


らロータリーには2階建ての仮設店舗が建設され、入居した店舗の売上げは5倍ほどに上がった。そうだが、地元も潤ったことから、地域も納得した上で開発が進み、2006年アクトアモールが華々しくオープンした。

取材を終えて

高槻市の中心部には、JR高槻駅と阪急高槻市駅の両駅を中心に広がる商店街や百貨店、医療機関、大学、また最近では住居系マンションの建設が進むなど、北摂でも屈指の元気な中心市街地ではないでしょうか。この取材を通じ、駅前商店街の発展には、大胆な区画整理などのインフラ整備の重要性を感じることができました。

編集部 尾浴 芳久

写真出典：(写真1)綴る 高槻センター街50年史(二部)



シティライフは今年で30年目を迎えます

30 anniversary City Life Archives シティライフアーカイブズ

北摂の歴史記録


シテイライフ アーカイブズ 検索

1971年 高槻市役所が駅前から移設

当初、高槻市役所や警察署など行政の中心はJRの駅前であった。しかし、中心地を活性化させるため駅前への百貨店の誘致が始まり、1971年に市役所は現在の桃園町に移設。JR高槻駅の北側には、1973年に西武百貨店がオープンの予定だったが、開店の4日前にかさいが発生し1年開店が遅れた。そのころには、高槻センター街では屋根つきのアーケードが完成していた。また、高槻市の人口は、この年に30万人を超えた。そして遅れること5年、1979年にJR高槻駅の南側に松坂屋がオープンした。

1992年 阪急高架の開発が完成

元々けやき通りは狭い道で、市役所からセンター街まではバスも通れないほどだった。またみずき通りは線路沿いに民家や商店が並んでいて、道がなかつた。しかし、1980年から約10年かけて阪急高架工事をするために、新たに道を作り線路を



1987年(昭和62年)、阪急高架事業の工事中のようす。


第10回 変貌を遂げる高槻センター街

1929年 高槻センター街が誕生

明治維新(1868年)後の高槻町(後の高槻市)は戸数わずか7百、人口3千の小さな町だった。住民の半数は農家で、数少ない商人も商売だけでは生活が成り立たず、半農半商が多かったようだ。1928年になると、高槻の中央部に現在の阪急電車の前身である京阪電気軌道の「新京阪線」が開通する。1月に高槻天六間、11月には京都まで全通。これをきっかけに住宅地の開発が始まって人口が増え、1929年には駅を結ぶ「新京町通り」に商店がぼつぼつと並び始めた。とはいえ、このころはまだ店の数が少なく、商店街といえるものではなかつたという。中川さんは、「大阪から商売人が進出して高槻市場を開いたんです。それで、周辺にどんどん商店が増え始めました」と話す。1931年には、高槻町や芥川町を始めとする5つの町村が合併、人口は2万人まで増加する。さらに、急行電車も停車するようになり、こうした時代背景とともに、後の高槻センター街である「新京町商店街」が繁栄していった。

歴史案内人

取材協力 中川修一さん



昭和25年11月6日、新京都商店街で生まれる。丸亀公代表取締役、高槻まつり会長、たつき中通り本通り商店街会長、わくわく探検隊顧問

親京阪の開通1928年(昭和3年)

1969年	人口20万人 学校建設ラッシュ
1970年	万博、高槻まつり
1971年	高槻市役所移転
1973年	西武百貨店火事、センター街アーケード完成
1979年	人口30万人 松坂屋、グリーンプラザ完成、阪急高架着工
1992年	けやき通り完成、みずき通り完成
2006年	アクトアモール完成

たのだった。今後の高槻について、中川さんはこう話す。「50年先の町や人口、職業がどう変化しているのか、全く想像もつきません。ただ、子ども達を地域で育てていくために、これまで商店街の役割だったコミュニケーションをどう担うかが、今後のまちづくりのキーになるのではないのでしょうか。」